

開所20周年

社会福祉法人 あそびじゆく



| | |
|--------------------|-----------|
| 生活介護事業所 | 茅工房 |
| グループホーム | MARIKO 寮 |
| 居宅介護・行動援護・地域生活支援事業 | くがわ支援センター |
| 相談支援事業所 | 組木 |
| 空床型短期入所 | YADOKARI |

20周年を迎えて

社会福祉法人あそびじゅく 理事長 中村里枝

あそびじゅくの20周年おめでとうございます。

10年前の3月21日に愛宕山少年自然の家で10周年をカレーを食べながらお祝いして、15周年を地場産業センターで行い、早いもので20年がたってしまいました。その間もご家族や関係者の皆様の力強い支援をいただきながら今日に至っています。

2024年辰年は何かと課題の多い年であるといわれています。1月1日に能登半島に大きな地震災害があり大変驚きました。度重なる震災や感染症の問題も含めて私たちは備えることの大切さや準備することの必要性を学ぶことができました。

しかし、感染症については、家族会と感染症対策のため健康管理委員会を中心に予防対策のためのマニュアルやフローチャートを作成して一人から感染を拡げない取り組みをしてきましたが、持ち込まれた感染症が一人から周囲の人へと拡がってしまい、施設を何日も閉所することになり利用者の方々には大変なご迷惑をおかけしてしまい、大変申し訳なく思っています。

2024年は、福祉においては大きな変化の年になっています。3年ごとに行われている報酬改定が今回は大きく変わり今後の施設の運営に関係してきます。茅工房のサービスは、集団から個へとシフトしていきます。グループホームは、地域連携推進会議を設置し地域との連携を強化して第三者の目が届きやすくなるが必要とされています。

福祉の現場は慢性的な人手不足と言われていています。あそびじゅくは人は足りていますが（人員配置、福祉法で定められた必要な人数）!!人が足りません!!

このような中で、利用者さんのニーズを汲み取り満足度をどう高めていくのかが今後の課題になっています。ご家族と協力して一つずつ検討して安全安心で本人が希望する支援につなげていきたいと考えています。

また、20年が経ち法人の運営が安定しているのは、法人の立ち上げ時期からご尽力いただいている理事、評議員、監事の先生方のお陰であると心より感謝しています。

家族会、利用者様、あそびじゅくを今日まで育てていただきありがとうございました。これからもよろしく願いいたします。

最近の研修会でよく紹介されている言葉がありますので紹介したいと思います
思考は運命を変える「マザー・テレサ」

思考に気をつけなさい
それは いつか**言葉**になるから

言葉に気をつけなさい
それは いつか**行動**になるから

行動に気をつけなさい
それは いつか**習慣**になるから

習慣に気をつけなさい
それは いつか**性格**になるから

性格に気をつけなさい
それは いつか**運命**になるから



20年の足跡～足を止めて振り返る～

社会福祉法人あそびじゅく 理事 中村洋人

山梨県甲府市、社会福祉法人あそびじゅくは一步一步足跡を残し20年の間歩き続けることができました。当時の社会は障害を持つ方たちを「共に生きる」「当たり前」の存在ではなく「援助の対象」や「哀れみの対象」という意識が強く、社会の中で「自分らしく生きていく」ことが難しい時代でもありました。今振り返ると、障害を持つ姉の弟として生まれた私は、家族として「当たり前」に「共に生きる」存在だと思っていました。しかし、社会を見渡すと「何か違う」と足を止め、不思議な違和感を抱きながら生活を送っていたことを覚えています。

2000年代は障害福祉制度が大きな転換期を迎えた時期でもありました。

措置制度から支援費制度へ移行し「自分の行きたいところを選べる」ようになったこと、2007年には「障害者権利条約」に署名し、障害を持つ方々に配慮した法整備に7年の時間を費やし2014年に批准。「一人の人間」として「自分らしく」生きていくことが求められ、少しずつ社会への扉が開かれた時期でもありました。

しかし、当時のあそびじゅくは「社会参加」「自分らしさ」とは程遠く、お店では入店を断られ、周りの目を気にしながらの生活に孤独と孤立を感じながら社会の中で存在していたことを思い出します。支援者と皆様と一緒にぶつかると分かっている壁に向かって進み続け、何度も何度も足を止められ言葉にできない経験をし、社会で生きていくことに諦めを感じたこともありました。しかしどんな時でも、理事長は足が止まりそうな私たちの背中をゆっくりと支え回り道を探しながら、「自分らしくありのまま～地域のかげがえのない存在として～」という理念を私たちに伝え続け一緒に歩み続けてくれました。「信じた先に花は咲く」私は母親でありながら法人理事長として「どんなに障害が重くても必ず地域で生きていける」「いつか絶対社会が変わる」と先見の明を持ち、信じ続けてきた姿に尊敬と偉大さを感じております。

理事長をはじめ皆様と共に歩き続けた20年間。

そして、またここからがスタートとなり皆様と共に足並みを揃えながら一步一步足跡を残していきます。

「誰もが持つ生きる権利の保障」「すぐそばで心が届く支援」を念頭に置きながらこれらも強い覚悟をもって邁進していきます。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

法人の概要

| | |
|----------|-------------------------|
| 平成14年8月 | 社会福祉法人あそびじゅく 法人認可 |
| 平成15年4月 | 小規模通所授産施設茅工房新築 開所 |
| 平成15年6月 | 居宅介護事業所くがわ支援センター 認可 |
| 平成16年2月 | グループホームMARIKO寮 認可 |
| 平成16年4月 | 小規模授産施設 開所 |
| 平成18年10月 | 共同生活介護事業所MARIKO寮 開所 |
| 平成19年7月 | 生活介護事業所茅工房へ移行 認可 |
| 平成19年7月 | 茅工房増設工事 |
| 平成21年12月 | MARIKO寮施設整備のため土地購入 |
| 平成24年4月 | MARIKO寮 開所 |
| 平成25年2月 | 相談支援事業所組木 認可 |
| 平成26年4月 | MARIKO寮 包括型のグループホームへと移行 |
| 令和3年4月 | 空床型短期入所YADOKARI 認可 |



空床型短期入所 YADOKARI

相談支援事業所 組木



法人役員紹介

当法人の役員の方々は、無報酬で役員会に出席していただいています。下記に記載した事項の許認可への協力や各年度の役員会に出席して法人の適性運営に協力していただいています。

監事の皆様には役員会へ出席して議案の討議や毎年度末の決算の監査等を実施して運営や役員会の在り方のご指導をいただいています。

平成14年8月「社会福祉法人あそびじゅく」として認可され、設立時の役員は理事10名・監事2名・評議員21名。

- | | |
|-------------------|---------|
| 1. 法人の設立 | 平成14年8月 |
| 2. 施設建設 | 平成14年8月 |
| 3. 小規模通所授産施設茅工房開所 | 平成15年4月 |
| 4. くがわ支援センター開所 | 平成15年6月 |
| 5. GH・鞠子開所 | 平成16年2月 |

[設立時の役員]

| 役員 | お名前 |
|-----|-------|
| 理事長 | 中村里枝 |
| 理事 | 丸山美智子 |
| 理事 | 丹沢雅彦 |
| 理事 | 戸川恵美子 |
| 理事 | 望月大和 |
| 理事 | 鈴木彦人 |
| 理事 | 井上勝六 |
| 理事 | 秋山晟子 |
| 理事 | 谷田正人 |
| 理事 | 雨宮文江 |

| | |
|----|-------|
| 監事 | 小倉恵一 |
| 監事 | 三上まゆり |

| | |
|-----|------|
| 評議員 | 小山隆夫 |
| 評議員 | 小野登 |
| 評議員 | 柳澤暢幸 |

| | |
|-----|-------|
| 評議員 | 内藤長臣 |
| 評議員 | 山田なほみ |
| 評議員 | 志村昭 |
| 評議員 | 上嶋准嗣 |
| 評議員 | 志村富子 |
| 評議員 | 秋山洋 |
| 評議員 | 三枝利仁 |
| 評議員 | 木田恵美子 |
| 評議員 | 村井つかさ |
| 評議員 | 川本貢 |
| 評議員 | 梅本実 |
| 評議員 | 中田芳晴 |
| 評議員 | 坂本静江 |
| 評議員 | 成沢秀仁 |
| 評議員 | 大柴佳清 |
| 評議員 | 成島洋子 |
| 評議員 | 中村俊洋 |
| 評議員 | 小倉洋子 |

平成16年の法人改革で理事6名・監事2名・評議員13名。

1. 共同生活介護MARIKO寮開所（自立支援法による変更）
平成18年10月
2. 生活介護茅工房へ変更認可
平成19年7月
3. 茅工房増築工事
平成19年7月
4. 平成21年MARIKO寮施設整備計画。甲府市下飯田1-11-6の
土地購入
平成21年12月
5. MARIKO寮建設
平成23年8月竣工
6. MARIKO寮開所
平成24年4月
7. 相談支援事業所組木開所
平成25年2月
8. 評議員選任・解任委員会設置
平成29年4月
9. YADOKARI開所
令和 3年4月

[現在の役員]

| | |
|-----|------|
| 役員 | お名前 |
| 理事長 | 中村里枝 |
| 理事 | 井上勝六 |
| 理事 | 望月大和 |
| 理事 | 谷田正人 |

| | |
|----|------|
| 理事 | 雨宮文江 |
| 理事 | 中村洋人 |

| | |
|----|-------|
| 監事 | 小倉恵一 |
| 監事 | 丸山美智子 |

| | |
|-----|-------|
| 評議員 | 上嶋准嗣 |
| 評議員 | 山本久美子 |
| 評議員 | 千野さなえ |
| 評議員 | 沖田幸 |
| 評議員 | 沖田正 |
| 評議員 | 山之内一江 |
| 評議員 | 阿佐美宗平 |



～道の駅 南きよさと～



茅工房20周年

茅工房サービス管理責任者 笠井智章

甲府市貢川に生活介護事業所「茅工房」を開所して20年が経ちました。「地域で生きていくこと」「社会とのつながりを大事にすること」が法人理念「自分らしくありのまま」につながることを信じて進み続けてきました。障害を持っていても社会の中で生きていくことができることを目指し障害理解、共生社会を考えながら順調に歩んでいました。しかし、5年前のパンデミックにより今まで行ってきたことが急に止まってしまったことに、私たち職員は動揺を隠しきれませんでした。皆様も急な予定変更やいつもやっていたことができなくなることに不安の色が隠せず苦しい中での生活が続いていたことに申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

しかし、当時の副施設長を中心に「必ず終わるから、その時の準備を今から始めよう」と声をかけてもらい、職員同士で何かできないかと模索。個別支援を取り入れることでもう一度利用いただいている皆様のことを知ろう！と新たな支援も始めることができました。個別支援を重ねることで一人ひとりの力を再確認でき、普段の生活の環境を整え、写真や絵カード、皆様に必要なツールを使うことで想いを相手に伝え、支援者も皆様の気持ちを汲み取れる時間も増えました。

令和5年3月からは、6ヵ月に1度日々の中で発揮してきた力を社会に向けて活かせる機会として個別外出に挑戦しています。本人が「選択」できる機会を大切にしながら「いきたい」「やってみたい」支援を大事にしています。しかし、社会の中にはまだまだ受け入れてもらうことがむずかしい環境があります。これからも社会参加を積み重ねながら近い将来「ふらっと立ち寄れる場所」「〇〇さんいらっしゃい」と出迎えてくれるような場所が増えることを期待し、私たちがその背中をそっと押し続けていきます。皆様これからもよろしく願いいたします。



MAR I K O(鞠子)寮を振り返る

MAR I K O寮サービス管理責任者 保坂亮平

平成 18 年、山梨県では初めて重度障害者を対象としたケアホームを開所しました。「どんなに障害が重くても地域で生きていける」という理事長の思いが地域住民の方々の理解を得られ空き家になっていた鞠子商店をお借りし「MAR I K O寮」としてスタート。その後、平成 2 1 年に今の場所へ移転しグループホームとして 6 名の皆さまと生活をしています。

開所当初は、親元から離れ寂しさや慣れない環境での生活に不安を抱える方もいましたが、一緒に生活を重ねることで「自分の居場所」として確立し徐々にお互いを認め合いながら今では「大切な仲間」として生活を送っています。支援者も初めはどうか不安でしたが理事長はじめ中村管理者と一緒に外部研修や事業所見学等を重ね、自ら知識・技術・発想力を学びMAR I K O寮で生活する方々により良い住まいとなるよう心がけています。普段の生活では「意思決定」を大切に、今日着る服を選ぶことや食べたいもの食べたり作ったりと「自分で選ぶ」環境を大事にしています。日頃の意思決定の積み重ねが自信となり最近では、県外への旅行や外出イベントも行い、おしゃれをしたりお買い物を楽しんだりと社会参加の機会も増えています。

これからは今まで以上に地域の方々にMAR I K O寮を知っていただきながら、どのように一緒に暮らしていけるかを考えていきます。MAR I K O寮の周りには素敵な社会資源（飲食店等）があるので皆と一緒に出勤しながら「地域の一人として」自分らしい生活を一緒に見つけていきたいと思えます。

そしてもっと沢山、自分がやりたいこと、好きなこと、経験できること、選択できることを大事にできるグループホームにしてきますので皆様これからもご協力宜しくお願いいたします。



くがわ支援センターを振り返る

くがわ支援センターサービス提供責任者 末木 崇

「買い物に行きたい」「病院へ連れてって」「お風呂に入りたい」など個別支援を基本としたくがわ支援センターも15周年を迎えました。障害を理由に外出や通院が難しい方や家族では社会参加が難しいなど、たくさんのニーズを聴きながら一人ひとりに合った支援を行っています。現在の障害福祉は「共に生きる社会」という考え方であり、本人のニーズや意思決定に合わせた支援が求められています。

ここ数年地域の中で支援を行うと様々な光景が思い出に残っています。プールや食事、温泉など楽しい思い出も沢山ありますが、私たちが楽しいだろうと思いついで支援をした結果、大きな声を出してしまったり、初めて一緒に行動した方の苦手な部分に触れてしまい機嫌を損ねてしまったりと皆様に迷惑をかけてしまうこともありました。

くがわ支援センターは個別で支援をする「責任感」「チーム連携」が非常に大切だと感じています。まずは、利用者のことを知ること。そのあとに好きなこと、苦手なことを知ること。そして、強みは活かして苦手なことに配慮する。これは一人ではなく関わるチームと連携しながら行うことが大切だと感じています。意思決定が難しくても必ず意志を伝えていくことを忘れずに、ご本人の持っている力を見つけ社会の中で発揮できるように努めていきたいと思っています。そして、利用されるすべての方が「自分らしくありのまま」な存在として地域で過ごせるように支援します。これからもよろしくお願いいたします。

